

宗教と性暴力

背景・目的

宗教は異なる他者の存在を尊重して生かす時、社会秩序として有効に機能するが、他方、権力的構造と結びついた時、他者の人格を否定する暴力—性暴力と経済的搾取という暴力—を生み出す危険な装置ともなる。また、宗教教義は、観念と現実を逆転させて、幻想の彼方に人を追いやる傾向がある。そこに起こる性暴力の仕組みと社会一般で起こる暴力のメカニズムとの構造的類比について分析し、暴力抑止の思考を模索する。本研究課題は、知の集積と実践の集積が双方向的に共有され、受講生の健全な市民感覚が養われることを意図したものである。

実施内容

【性暴力被害者の母親の証言】性暴力問題において宗教者は第三者ではありえない。人を指導し、人の心のケアに当たる時、暴力が戸口に待ち伏せしている。闘病中の自分の連れ合いの心のケアに当たったキリスト教牧師が娘に対して性的暴力を起こそうなどとは通常考えられない。娘に対する性的暴力が発覚すると同時に、母親の過酷な苦しみが始まった。教団サイドは当初、建前論に終始し、問題に正面から向き合おうとしなかった。有力者であるがゆえに当事者をかばう動きさえ見られた。また、母親は、「愛と赦し」の教義上の論理が問題の本質を覆い隠す機能を果たしている側面に気づかされていく。母親は、権力の論理が世の中のいろいろな形の暴力—戦争であれレイプであれ—に通底していることを再認識し、「沈黙の共謀」に与することなく、問題に立ち向かう道を選択した。裁判では勝訴したが、娘は自死した。母親は今もなお、夜の静寂に恐怖を感じるトラウマを抱え続けて

いる。娘に対する暴力が母親から物理的に引き離された1対1の限られた空間で発生している点、当事者が娘の将来の職業選択に関して指導できる立場を利用している点などは、他の性暴力と同じ構図である。特別授業を通して、この母親は、宗教が性暴力と無縁ではないこと、また、性暴力が人の人生をつぶすことを証言した。感想レポートを書いた受講学生たちは、性暴力が誰の身にも起こりうること、性暴力は世の中の権力システムと深くつながっていること、性暴力被害者および関係者には徹底的に耳を傾け、生きていく意味を一緒に考えることの重要性を認識した。

【カルト脱会者の証言】体罰・暴力などによるマインドコントロールは、今日の社会において分断されている人と人とのつながりを強制的に実現する方法としてカルト団体ではよく使われている。限られた空間の中で、対等性を奪われ、脅迫にさらされ、肉体の酷使を強要される時、人は容易に洗脳され、そこからの脱却が困難となっていく。逃れようにも逃れることのできない関係性の中で、暴力が発生する。その結果、精神が破壊され、財産まで収奪されることも珍しくない。また、自分自身のアイデンティティが十分に出来上がっていない段階で、複雑な事柄を単純化して答え提示する強烈な宗教的教えに誘われる時、人はそこへと身をあずけたくなる。そういう仕方での隙を巧妙につき、時には暴力を行使するカルト団体の手法は、「オールジャパン」方式で他国に伍していく競争的強さを強調する潮流が優勢になりつつある現代の日本社会の仕組みと構造的に類似している面も否定できない。脱会者3名の証言は、受講学生に宗教の危険性と生きる意味を再考させた。